

簡単な英語を使って、自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒の育成

～小学校から中学校へ、学びの連続性を意識して～

託麻原小学校 教諭 三宅 貴子 若葉小学校 教諭 清水 佳代
教育委員会指導課 指導主事 森 祐一 (H30, 31年度)

要 約

社会の変化に合わせて、外国語によるコミュニケーション力（資質・能力）の育成が求められている。そこで、育てたいコミュニケーション力を明確にし、Small Talk の題材を精選したり、互いの考えや思いを伝え合う言語活動を取り入れたりしながら、小中のスムーズな接続を意識して本研究に取り組んだ。本研究を通して、「外国語（英語）への意欲的な参加」や「ペアやグループで話す活動」についての意識が高まり、互いにコミュニケーションをとることへの自信につながる事が明らかになった。

1 主題設定の理由

社会のグローバル化が急速に発展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されている。

そういった背景の中、英語を話せるようになりたいと思う児童生徒は多いが、いざ話すとなると、どんな時にどのような英語を用いて話せばよいか自信をもてない児童生徒がいる。また、「話さなくてはならない」という思いが先に立ち、自分の思いや考えを一方向的に伝えて会話が終わってしまう、という場面が多く見られる。

そこで、本研究では、児童生徒が慣れ親しんだ（学習した）英語を使い、相手を大切にしながら、目的・場面・状況に応じて、互いの考えや気持ちを伝え合い、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために、上記の主題を設定した。

2 研究の仮説

小中7年間で育てたいコミュニケーション力（資質・能力）を明確化し、小中の系統性を踏まえた連続性のある指導の中で、慣れ親しんだ（学習した）英語を活用しながら自分の考えや気持ちを表現できるような言語活動を工夫すれば、主体的に互いの思いを伝え合うことのできる児童生徒に育つであろう。

(1) 「コミュニケーション力の明確化」とは

コミュニケーション力とは、「主体的に互いの思いを伝え合う」力と捉える。その素地及び基礎を育成するには、まず、話し手や書き手が自分の考え、思い、意図、意思などをもち、積極的にコミュニケーションを図ることが大切である。その過程において、児童生徒は伝え合うことの大切さと楽しさを感じる。これらの活動を繰り返していくことで、コミュニケーション力（資質・能力）が備わっていくと考える。

(2) 「小中の系統性を踏まえた連続性のある指導」とは

小中の系統性を踏まえた Can-Do リストを作成、活用し、小中で系統的なゴールを示すことで、それに向かって児童生徒が学んでいけるようにする。その過程において、「Small Talk」「互いの考えや気持ちを伝える言語活動」「振り返り」という活動を小中ともに設定することで、連続性のある指導ができると考える。

(3) 「言語活動の工夫」とは

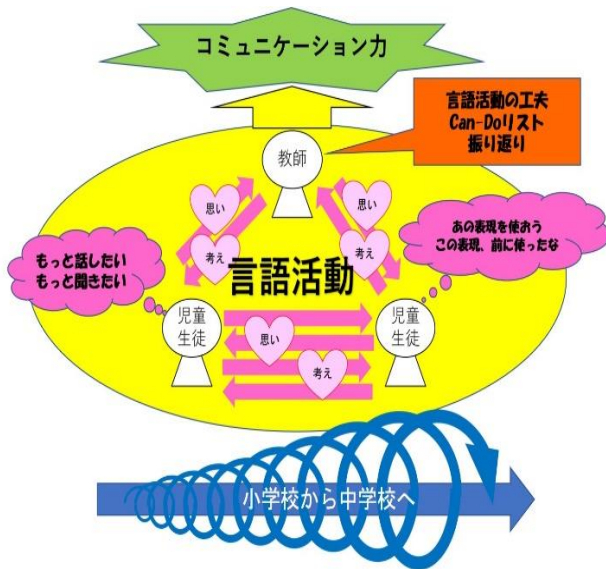
言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」である。まず、児童生徒が伝える必要性を感じる目的や場面、状況を明確化することで、児童生徒は伝えるために必要な言語材料を整理したり取捨選択したりするであろう。これらの活動を繰り返し行うことで、コミュニケーション力が高まると考える。

3 研究の視点

研究の仮説を具体化するために、以下を研究の視点とする。

- (1) 児童生徒が、英語を使って考えや気持ちを伝え合いながら、コミュニケーション力（資質・能力）を高めることができる言語活動の工夫
- (2) 主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるための振り返りの工夫

4 研究の構想図



5 研究の実際

- (1) 言語活動の工夫

① 5年生の取組

熊本で試合が行われたラグビーワールドカップや世界女子ハンドボール選手権大会観戦を前に、世界の国々への興味が高まっている児童の実態をもとに、「おすすめの色を紹介しよう！」という単元のゴールを設定した。自分の伝えたい内容を整理したり英語で表現できない部分を補ったりする手段としてタブレットを使用し、国旗や紹介したい物の写真を提示しながらおすすめの色を紹介を行った。学習が進むごとに、「I want to eat / see / play ~.」と自分の思い（行きたい理由）を伝える表現を選んで使っていくことで、自分の意思が反映された言語活動へと発展していった。また、「It's nice / beautiful.」などの反応の仕方や目線や笑顔などのよりよいコミュニケーションの態度についても考え

させ、聞く意識の向上や他者理解の深まりをねらった。

② 6年生の取組

「Who am I? in Takumabaru!」という単元のゴールを設定し、学校に勤務する職員当てクイズを実施するようにした。

ゲーム形式で行う重要語句等の練習の際には、単にキーワードとなる単語だけを繰り返すのではなく、「I like / want apples.」「I play soccer.」といった簡単な文にして行い、児童が対象となる人物をより詳しく紹介できるような素地づくりを進めた。表現に十分に慣れさせたり、自己紹介をしたりした後、クイズづくりに取り組んだ。児童はクイズを作る過程で、職員に英語で「好きなこと」「していること」「欲しい物」などの質問をすることで、英語で話す必然性をもたせた。また、作ったクイズを出題したり、友達のクイズに答えたりする活動を通して、友達とコミュニケーションが図れるようにした。

③ 中学校での取組

『A Mother's Lullaby』を読み、物語の感想や、戦争についての自分の思いを分かりやすく伝え合う。」という単元のゴールを設定した。まず、学習したページごとに、物語の内容を絵と簡単な英語のキーワードをもとに要約させた。最初は難しく感じていた活動であったが、要約する活動を繰り返すことで、スムーズに発話ができる生徒も出てきた。その後、小学校の修学旅行で平和学習をした時の写真や、戦争に関するいくつかの写真を使って、自分の考えを相手に伝え合う活動を行った。生徒の中には、インパクトのある戦争の写真等を選んで話をしている生徒もおり、自分が感じた戦争への思いを何とか相手に伝えようとしている様子が見られた。また、分かりやすく伝えるために、難しい表現を使うのではなく既習の語や文法を使ったり、伝わりにくい表現は写真にメモをして示したりするなどの工夫をしている生徒も見られた。

- (2) Small Talk のテーマ設定の工夫

① 5年生の取組

「I want to go to Italy.」の単元の第3時では、児童が興味をもって教師の話聞き、簡単な言語表

現に触れさせるため、ラグビーワールドカップ開催時の熊本市街地の様子の写真を提示した。市街地に掲げられていた国旗の国名や色を尋ねたり、教師の行ってみたい国について紹介したりして、教師と児童とのやりとりの場を設定した。「What color / country is this?」など、教師が既習表現を繰り返して尋ねることで、スムーズに応答できるようになる児童の姿が見られた。また、写真の提示時間を短くすることで、「One more.」などの表現を引き出し、対話をつなげることにもつながった。Small Talkの後半では、教師の行ってみたい国について、「I want to eat / see ~.」や「I like sweets.」などのまとまった英文を聞かせることで、会話のモデルを示し、児童がその後の言語活動で想起できることを意図した。さらに、児童の「I want to go to America.」の発話に対し、「Why?」と問い返すことで本時の学習内容である「行きたい理由を伝え合う」という目的を明確にして主活動に移ることができたと考える。

②6年生の取組

Small Talkのテーマとして、「好きなキャラクターを教えよう」を設定した。児童の中には、「好きな〇〇」というテーマは話しやすいと感じている児童が多い。しかし、歌手やスポーツ選手など実際に存在する人物等になると興味の度合いが変わってくるので、話しづらさを感じる児童も多かった。そこで、テーマをキャラクターに設定することで、漫画の中の登場人物などを選んで答えている児童もおり、会話を楽しめる児童が多かった。好きな〇〇を尋ねると、児童が自然に「Why?」と理由を尋ねたり、質問に答えたりして会話が弾むことが分かった。また、Unit3「He is famous. She is great.」では、自分の好きなものや欲しいもの等を紹介する内容であるので、Small Talkからの接続がスムーズで、本活動でも笑顔で友達と話す児童が多くみられた。

③中学校での取組

「初めて外国から熊本に来る人に、おすすめの季節を教えよう」をSmall Talkのテーマに設定した。単に自分が好きな季節を言うのではなく、「初めて熊本に来る外国人に」等の場面設定を与え、相手意識をもたせながらコミュニケーションをとるように工

夫した。また、その理由まできちんと話させることを大切にした。理由も「暑いのが好き」や「寒いのが好きではない」等の簡単な理由ではなく、相手が納得するような理由を伝えるということを意識させた。夏がおすすめだという理由は「天草の海がきれいだから」、春がおすすめだという理由は「熊本城の桜がきれいだから」など、熊本のいいところを伝えようとする会話ができており、会話の目的・場面・状況を理解し、思考の深まりが分かる活動となっていた。

(3) 振り返りシートの活用

①小学校の取組

毎時間の最後に設定している振り返りの時間では、振り返りの視点として、「できるようになったこと、めあてについて感じたこと、外国の文化や言葉について気付いたこと、友達のことで感じたこと、もっと知りたいこと」の5項目を提示した。これは、本時の学習の内容理解と他者理解をねらって精選したものである。また、児童にこのUnitで何が「できるようになるのか」がはっきりと分かるように振り返りシートに明記し、自分のゴールを意識させた。

5年「I want to go to Italy.」の学習での児童の振り返りシートには、「〇〇さんが、インドに行きたいって言っていたのは、たぶんカレーが好きだからかな。」「〇〇さんで行きたい国が一緒だったけれど、理由が違った。」など、友達の思いを推測して相手の気持ちを分かろうとしたり、「〇〇さんの選んだ写真はきれいでよく分かった。」と友達の表現方法から学ぼうとしていたり、他者と学び合う価値に気付く記述があった。また、「行きたい理由が言えるようになったけれど、もっとたくさんの人と言えようになりたい。」など、自分の学びを振り返り成長を感じたり課題を見出したりして意欲を高めることにもつながった。

6年生では、毎時間のゴールをスモールステップで設定することで、児童に達成感を味わわせ、最終的にコミュニケーションを図る楽しさを実感させるようにした。児童からは、「今日は、Nice!やMe too. やあいづちがたくさんできてよかったです。これからもこれを続けて、会話が長く続くようになりたいです。」「理由を聞いたり話したりしてどのようなこ

とが思い出に残ったりしたか聞きたい。同じことが思い出に残った人とどんな理由か話したい。」など、会話を楽しんだり、会話を長く続けたいと思ったりしている様子が見えたと。

また、児童から集めた振り返りシートには、教師が励ましのコメントを書いたり授業の中で紹介したりすることで、達成感を感じさせるとともに、さらなる学びの動機づけを図った。

③中学校での取組

中学校の振り返りシートでは、その単元で何をやるのか、何を頑張ればいいのかを1枚で分かるようにし、裏面には各授業時間の自己評価の基準を載せる工夫をした。また、授業の最後に学んだことや感じたこと等の、感想を英語で振り返る時間を設定し、振り返りシートの「Comments and opinions」の欄に記入をさせた。よく書けている生徒の文章を紹介していくことで、英語で書く分量も増え、思考の深まりを感じることができた。「Today's class was very sad and difficult. I think "dead" is a very sad word for me.」というように、自分の気持ちをコメントとして書く生徒もいた。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

本研究は、自分の考えや気持ちを伝え合える児童生徒の育成を目指した。そこで、まず英語を使って話す楽しさを感じ、好きだと感じている児童生徒の変化を調べた。

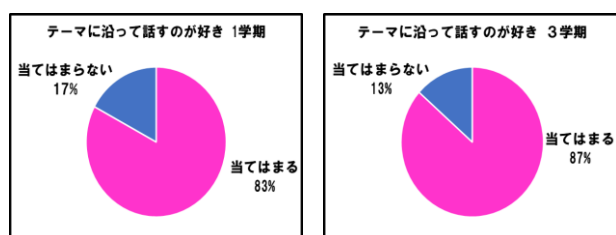


図1 5, 6年生の意識の変化の様子

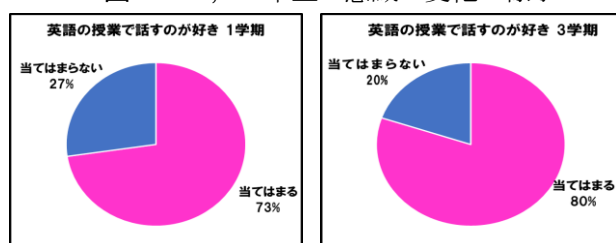


図2 中学生の意識の変化の様子

小学校においては、単元の始めは「英語は難しい。」と感じていた児童も、言語活動を重ねていくと「みんなと楽しく話せて嬉しかったです。」と変化が見られた。中学校でも、「コミュニケーションが得意でなかったが、伝え合う活動を繰り返しているうちに相手の顔が見られるようになり、楽しく会話することができた。コミュニケーションをとることが自信につながっている。」のように、自分の成長を感じている生徒が出てきた。

また、Small Talk等で、同じテーマを繰り返し行うことで、話す内容が深くなり、表現方法の幅が広がっていくことが分かった。中学生の感想でも「回を重ねるごとに、伝え方のバリエーションが増えてきた。」という意識の変容が見られた。

さらに、振り返りの活動を通して、自分の成長を可視化することで、更なる意欲の向上につながることも分かった。「今日勉強したことを、外国の人と話すときに使ってみよう。」「あまり話したことのない人とも、会話をして仲良くなった。」など、外国語活動を通して様々な人と関わり合うことに喜びや期待感をもつ児童生徒の声もあった。

このように、小中の連続した学習活動は大変有効性があり、継続指導することで、今後さらにコミュニケーション力を大きく高めることが期待される。

(2) 課題

小学校から中学校への学びの連続性が明確化できるようにCan-Doリストを作成した。しかし、授業の流れなどの形式的なものはうまく連続していくことができたが、学年や、単元ごとでの小中の系統的なゴールを明確に示すことの難しさを感じた。本研究を通して、小中の学びを連続させることの大切さを感じた。今後は同じ中学校区における小中連携を深めていくながら、児童生徒の育成を目指していきたい。

7 引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』2017年
- 2) 渡邊寛治『指導と評価2010年3月号』 図書文化2010年